

Title	レーニンとゴエルロ・プラン
Author(s)	小野, 堅
Citation	大阪外国語大学学報. 25 p.165-p.179
Issue Date	1971-07-20
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80414">https://hdl.handle.net/11094/80414</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## Ленин и план ГОЭЛРО

ОНО Катаси

В 1920 году, в тяжелый период в жизни молодой Советской России был разработан план ГОЭЛРО, единый государственный хозяйственный план, рассчитанный на перспективу в 10–15 лет. В разработке плана участвовало много ученых и специалистов, которыми руководил Г.М.Кржижановский. Он пишет так в своей работе, посвященной 35-летию плана ГОЭЛРО. “В чем заключилось существо плана ГОЭЛРО? Это был ленинский план создания материальной основы социализма в нашей стране на базе ее электрификации, первый государственный перспективный план восстановления и социалистической реконструкции народного хозяйства Советской России на высшей технической основе.” (подчеркнул — ОНО).

В моей статье рассматриваются ленинские идеи по электрификации в период дооктябрьский и послеоктябрьский и их отражение в плане ГОЭЛРО.

В результате приводится следующий вывод:

Во-первых, в переходе слаборазвитой страны к социализму основными задачами являются социалистическая индустриализация и социалистическое преобразование сельского хозяйства. Для этого необходимо создать материально-техническую базу. В Советской России электрификацией страны была конкретизация этого общего положения. На основе электрификации можно было установить крупную машинную промышленность, и электрификация страны создала условия для перехода мелкого и отсталого сельского хозяйства к социалистическому.

Во-вторых, историко-конкретная обстановка в Советской России придала плану электрификации следующие особенности. а) В условиях военного коммунизма план ГОЭЛРО играл важную роль в укреплении союза рабочего класса и крестьянства. б) Процесс выполнения плана служил культурной революцией особенно в деревне.

Наконец, план ГОЭЛРО имеет важное значение как перспективный хозяйственный план. План ГОЭЛРО — это начало перспективного планирования в советском народном хозяйстве.

Таким образом, план ГОЭЛРО, разработанный под непосредственным руководством Ленина, имеет важное значение, не только хозяйственное, политическое и социальное, но и культурное.

1920年12月22—29日モスクワでひらかれた、第8回全ロシア・ソヴェト大会へのロシア電化国家委員会（ゴエルロ）の報告、『ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国電化計画』<sup>9)</sup>が、のちに、最大の肯定的形容詞をともなつてソヴェト経済史に不動の位置を占めた通称ゴエルロ・プランの全貌であった。

プランは、向う10—15年の長期経済計画で、電化事業をその中心においたものだったが、それは、ひとり国の電化計画にとどまらず、電化を基礎に、国内戦・軍事干渉でいちじるしく崩壊した国民経済の復興・進展を計り、社会主義建設の物質的・技術的基礎を確立せんとする全国的経済プランであった。

第8回全ロシア・ソヴェト大会でレーニンは、「共産主義とは、ソヴェト権力プラス全国の電化である」<sup>9)</sup>とのべ、ゴエルロ・プランを「第2の党綱領」<sup>9)</sup>であると唱った。

第8回全ロシア・ソヴェト大会のまえに本として出版され、同大会に資料として配られた、質と量において膨大なこのプランは、1920年2月の全ロシア中央執行委員会の決定に従って発足し同年春から活動を開始したロシア電化国家委員会（ゴエルロ）が、170名以上とも、あるいは200名以上ともいわれる学者、専門家の参加をえて作成した「科学的研究」<sup>9)</sup>の「総括」<sup>9)</sup>であった。

この計画書の前半にはつぎのような項目で一般的概括が与えられている。A) 電化と国家経済画、B) 電化と燃料供給、C) 電化と水力、D) 電化と農業、E) 電化と運輸、F) 電化と工業。後半に、各地区別（たとえば、北部地区、中央工業地区、南部地区など）の電化の基本案が示されている。

この膨大なプランのなかの具体的な数字を、1955年に35周年記念として出版された『ゴエルロ・プラン』第2版——1920年の複製といえる——に付せられている編集論文『偉大な経済計画』<sup>9)</sup>のなかでのプラン概説から引いて紹介すると大体つぎのようである。

ゴエルロ・プラン実施のために向う10—15年間の総支出は170億ルーブリ<sup>9)</sup>で、大規模工業、運輸の発展に圧倒的部分があてられ、電力建設部門には12億ルーブリの支出が算定されている。<sup>9)</sup>主要工業生産物の生産は、ゴエルロ・プランの課題として、銑鉄820万トン（1920年には11万6000トン——以下括弧内の数字は1920年のもの）、鋼鉄650万トン（19万4000トン）、鉄鉱石1960万トン（16万4000トン）、石炭6230万トン（860万トン）、石油（ガス含まず）1180万—1640万トン（380万トン）、泥炭1640万トン（140万トン）、セメント775万トン（3万6000トン）、レンガ100億箇（2億箇）、紙68万8500トン（3万トン）。<sup>9)</sup>プランでは、とくに重工業部門をもっとも成長させようとし、冶金工業生産高を1913年水準に対して97%増、化学工業——150%増、建設材料——158%増となっており、一方せんい・食品工業も10年間で、戦前水準の47—48%増加が計画されている。<sup>10)</sup>このプランでは、20の火力発電所（総出力111万kw）と10の水力発電所（64万kw）の設立（《B》プログラム）が計画されている。この計画のほかにプランはいわゆる《A》プロ

グラムなるものをもっていた。それによれば、レニングラド、モスクワ区、ドンバス、ウラルその他の現存の発電所の統合などによる、もっとも経済的・合理的な利用を目的とするものであった。<sup>11)</sup> また、運輸の部門においても、1913年に比べて、80—100%貨物輸送を増大し、広汎な鉄道の新建設と主要幹線の電化が計画されている。<sup>12)</sup> 農業においても 農業の機械化と電化の課題が打ちだされ、農業のたちおくれを一掃する方策が建てられている。<sup>13)</sup>

ゴエルロ・プランはこのように電化を中心にした国民経済全般の復興・再編成の一大プランであったが、このプランが作成された1920年という時期は、国内戦争と外国の軍事干渉（終焉に近づいていたが最終的終結には至っていなかった）による国民経済の極度の崩壊の時期であった。そのことは、前記工業生産の数字にも反映されているが、別の資料によっても、たとえば、1920年の工業生産物は1913年水準の14.5%、そのうち大規模工業のそれは13.1%（機械製作、金属加工では、わずかに13年水準の7.5%、銑鉄生産ではわずかに2.7%）<sup>14)</sup>といずれもいちじるしく低落していることがわかる。また、戦時共産主義体制下での食糧徴発のもとで農村の状態はきわめて困難を呈していた時期であった。クロンシュタットの反乱を機に、「食糧税」への切り替えをもって、ネップへ劇的な政策転換が行われたのは翌1921年の春であったという事情からもそのことは明らかである。

このような困難な時期に、遠大な電化計画を大々的に打出し、機会あるごとに電化の意義をレーニンが高唱したのであるから、1920年10月、クレムリンにレーニンを訪ねたH・G・ウエルズは、「クレムリンの夢想家」<sup>15)</sup>とレーニンを呼んだし、また、当時、このプランの非現実性を疑わなかったものは、электрификация, electrification（電化）ではなく、электрофикация, electric-fiction（電虚）である<sup>16)</sup>と揶揄した。

ところが、この「フィクション」は、実際には、予定期間内に当初の目標をオーバーして達成されたのである。工業生産の戦前水準は1930年には実現し、1934年までに地区発電所の出力は366万6000kwで、これは、ゴエルロ・プラン予定電力の約2倍であり、電力にかんする《A》プログラムはすでに1926年に、《B》プログラムも1930年に遂行されている。1935年のソ連邦の電力総生産は1913年の13.5倍、1921年の52倍増という規模に達している。工業、農業の総生産高に占める工業生産高の比率は1913年の42.1%に比して、1935年には78.7%となり、大規模工業の総生産高は1913年の110億ルーブリが1935年には、621億ルーブリ（1926/27年価格）に達しており、工業大国に生まれ変わったのである。<sup>17)</sup>

国内主要経済地区には多数の発電所が建設され、かつて闇に閉ざされていた農村には、「自然でない光」<sup>18)</sup>が提供され、農村においても社会主義建設の物質的・技術的基礎が確立する土台ができていった。ゴエルロ・プランは社会主義のもとでの最初の大きな経済計画として、のちの第1次、第2次5カ年計画のなかで実を結んだのである。ゴエルロ・プランは、その大きな経済計画としての意義と同時に、政治的・社会的にも大きな意義をもっていた（それについては、またあとでふれる）。

この膨大なゴエルロ・プラン作成の責任者であるゴエルロの議長は、『労働者階級解放闘争同盟』時代以来のレーニンの友であり、のちにゴスプランの議長をもつとめたエネルギー論専門家の学者ゲ・エム・クルジジャノフスキー（1872—1959）<sup>19)</sup>であった。

クルジジャノフスキーは、前述のゴエルロ・プラン 35周年記念出版物『ゴエルロ・プラン』（1955年）の巻頭に一文を寄せ、そのなかで、ゴエルロ・プランの本体は一体何にあったのか？と問を設け、自らつぎのごとくそれに答えている。「それは、電化を基礎に我国に社会主義の物質的基礎を創設するというレーニンの計画であり、最高の技術的基礎の上にソヴェト・ロシアの国民経済を復興し、社会主義を再編成するという最初の国家的将来計画であった」<sup>20)</sup>（傍点——小野）。

以下、この小論は、レーニンの電化の思想をあとづけ、<sup>21)</sup>それが、ゴエルロ・プランにどのように反映されたかを検討し、それらをとおして、ゴエルロ・プランの性格および意義を明確化することを目的とする。ゴエルロ・プランの成立過程はそれ自体としてまた、詳しく別に論ぜられなければならない。

1) План ГОЭЛРО. М., Госполитиздат, 1955. に収められているものを利用した。それによると1920年に出たものはつぎのようになっている。РСФСР Научно-технический отдел Высш. Сов. Нар. Хозяйства. ПЛАН ЭЛЕКТРИФИКАЦИИ Р. С. Ф. С. Р. Доклад 8-му Съезду Советов Государственной Комиссии по Электрификации России. Государственное Техническое Издательство, М., 1920.

2) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 42, стр. 159 (соч. т. 31, стр. 484.) 括弧内は全集4版の巻数ページ数である（以下同じ）。邦訳は、大月書店版『レーニン全集』を利用した。以下邦訳の頁は省略。

このレーニンの有名な言葉は『第8回全ロシア・ソヴェト大会報告プラン』（1920年12月13～22日に執筆）のなかで、「電化+ソヴェト権力=共産主義」（Полн. собр. соч., т. 42, стр. 381.）として記されている。同じプランには、また「共産主義=ソヴェト機構+電化」（Там же, стр. 380.）という形でも書き表わされている。また、同年12月に書かれた『電化に関する覚書』（Там же, стр. 227.）にも「共産主義=ソヴェト権力+電化」の式がみえる。

3) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 42, стр. 157 (т. 31, стр. 482).

4) В. И. Ленин. Полн. собр., т. 42, стр. 341 (т. 32, стр. 116).

5) Там же.

6) См. План ГОЭЛРО. стр. 11—28.

7) 総額170億ルーブリのうち110億ルーブリは金なり輸出でまかない、不足額60億ルーブリは長期公債か利権で埋める考えであった。（См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 43, стр. 173 (т. 32, стр. 285).）

8) См. План ГОЭЛРО. стр. 17.

9) См. Там же.

10) См. Там же, стр. 18.

11) См. Там же, стр. 19.

12) См. Там же.

13) См. Там же, стр. 18.

14) См. П. Б. Жибарев. Индустриализация СССР — великий подвиг советского народа. Изд-ство МГУ, 1969, стр. 23, 27.

- 15) См. Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС. Воспоминания о В. И. Ленине, т. 5, стр. 307—310. レーニンとウエルズの会見は有名だが、ドラプキナの作品にもその模様が描かれている。См. Е. Я. Драбкина. Зимний перевал. 《Новый мир》 1968, № 10. 邦訳, イエ・ヤ・ドラプキナ著, 山村房次訳『冬の峠』, 新日本新書, 1970, 428—445ページ。
- 16) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 42, стр. 343 (т. 32, стр 118). 邦訳では злектрофикация を「電気作りごと」としているが、「電化」との対比で敢て「電虚」と訳しておく。M. Dobb. Soviet Economic Development Since 1917, 3-rd ed. p. 315.
- 17) См. План ГОЭЛРО. стр. 22—27. 「別表」参照。

別表 ゴエルロ・プラン遂行状況（工業）

指 標	単 位	1913年	1920年	ゴエルロ ・プラン	1935年	ゴエルロ・プラン に対する1935年比%
1913年に対する工 業総生産高比%	%	100.0	13.75	180~200	570.8	3.2~2.9倍
地区発電所出力	1000KW	177	255*	1750	4540	258.6
電 力 生 産	100万KWH	1945	500*	—	26294	—
石 炭	100万トン	29.1	8.6	62.3	108.9	174.7
石油(ガス含まず)	〃	9.2	3.8	11.8~16.4	25.1	213~153
泥 炭	〃	1.7	1.4	16.4	18.5	112.8
鉄 鉱 石	〃	9.2	0.164	19.6	27.1	138.2
鋳 鉄	〃	4.2	0.116	8.2	12.5	152.4
鋼 鉄	〃	4.2	0.194	6.5	12.5	192.3
圧 延 材	〃	3.5	0.147	7.0	9.4	134.3

\* 1921年

出所：План ГОЭЛРО. стр. 23.

- 18) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 42, стр. 160 (т. 31, стр. 484).
- 19) См. Энергетический институт АН СССР и ЦГАОРСС СССР. Труды ГОЭЛРО. Соцэкгиз, М., 1960, стр. 259—262. にクルジジャンフスキーの紹介がある。
- 20) План ГОЭЛРО, стр. 6.
- 21) 前掲の Труды ГОЭЛРОにゴエルロに関するレーニンの資料がかなり詳しく出ているが、筆者は『レーニン全集』の4版, 5版を中心にしてみた。

## 2

レーニンは10月革命前に、その著作ですでに電化の意義と役割についてふれている。

たとえば、『ロシアにおける資本主義の発達』（1896—1899年に執筆）のなかで、プラウその他農業機械への電力の利用が、かなりの経費節約をもたらすという事実をレーニンは知っていたし、<sup>22)</sup>『農業における資本主義』（1899年執筆）のなかにもつぎのような叙述がみられる。「農業への機械の応用、蒸気の応用がはじめられ、急速に発展しはじめた。また電気の応用もはじまっているが、これは——専門家が指摘しているように——この生産部門では蒸気よりも大きな役割を演ずるにちがいない。」<sup>23)</sup> 1901年に書かれた『農業問題と「マルクス批判家」』のなかでは、農業

における電気の役割を大きくみた諸家の著述に目をむけ、経費の面でも、効率の面でも電気エネルギーを農業に導入することの優位をのべ、「農業への電気工学の導入が大規模生産のどんなに巨大な勝利を意味する」かはあまりにも明白であること、<sup>24)</sup> また、電気エネルギーを遠隔の地に送ることの可能性が、運輸のいちじるしい発達とともに、都市と農村の差を少なくし、電気エネルギーを獲得するための滝、運河、河川の利用が、「工業の分散」に新しい刺激をあたえることを推測している。<sup>25)</sup> 1914年に『プロレタリアスカヤ・プラウダ』第19号に発表された『年4000ルーブリと6時間労働』では、先進国アメリカにおける機械動力の大きさについてふれている箇所です、つぎのように電力の力の大きさに目をみはっている。「アメリカでは加工工業でも機械の動力は、全部で1800万蒸気馬力と算定されている。しかもそれと同時に、全水力資源の調査は、1912年3月14日の報告によれば、アメリカが水力を動力に変えることによって、さらに一挙に6000万馬力を得ることができることをしめしたのである。」<sup>26)</sup> と、また、1916年に書いた『資本主義の最高段階としての帝国主義』（帝国主義論）でも、「技術の最新の成果にとって、19世紀末から20世紀初めにかけての資本主義にとって、もっとも典型的な産業」である「電気産業」をとりあげ、2大先進国ドイツとアメリカのこの産業部門での集積を検討し、両国の電気トラストの世界支配と世界分割の実体を示している。<sup>27)</sup>

以上のように、レーニンは10月革命前に、電気エネルギーのもつ経済的・技術的面で先進的意味と、したがって、電化が生産力発展、国民経済再編成の観点から工業、運輸、農業の部門で大きな役割を果たすことを知っていた。

ただし、ここで注意しなければならないことは、レーニンが1913年に書いた『技術の一大進歩』という論文のなかで、イギリスの化学者ラムゼイの発見した炭酸ガス化は従来の石炭エネルギーを2倍も多く利用しうらでなく、そのことから更に、エネルギーを電気に変えることになれば、経費も従来のものに比べて減り、人間労働も節約され、家庭での光熱費も安くなる等の工業上の大変革をもたらすこと必定である点を指摘しながらも、レーニンは「現代資本主義制度のもとでの社会生活全体にとって、この変革のおよぼす諸結果は、その発見が社会主義のもとで呼びおこすそれとは、まったくちがったものであるだろう」とのべ、資本主義のもとでは、これらの技術的変革は、「勤労者を賃金奴隷制に運命づける社会的諸条件を日ごとにますます」成長さすものだという洞察を行っている、点である。<sup>28)</sup> 社会主義のもとではじめて、技術が、真に人間解放と結びつき、人間生活に寄与するであろうという考えをレーニンは強調している。レーニンの技術革新に対するこの思想は今日の意義をもって生きているといわなければならない。

22) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 3, стр. 218—219 (т. 3, стр. 187—188).

23) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 4, стр. 104 (т. 4, стр. 98).

24) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 5, стр. 139 (т. 5, стр. 127).

25) См. там же, стр. 151 (стр. 138).

26) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 24, стр. 272 (т. 20, стр. 52).

27) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 27, стр. 366—370 (т. 22, стр. 233—238).

10月革命後、1917年12月に人民委員会議は巨大株式会社『1886年電灯会社』の電力設備とすべての発電所の国有化にかんする布告を採択している。レーニンは、人民委員会議議長としてその布告に署名している。<sup>329)</sup> このことは、革命直後、ソヴェト政権が打出した、経済の「管制高地」掌握の一環として、銀行国有化につづき、はやく電力関係をも確保せんとする方策のあらわれであり、電力生産が国民経済復興に大きな意義をもつとの考えによるものであった。<sup>330)</sup>

しかし、出力において小さく、活動においてばらばらであり、設備も古いこれら現存の発電所の国有化だけでは不十分であった。レーニンは、早くも1917年12月15日に、ア・ヴェ・ヴィンテルを呼び、モスクワ郊外シャトゥラの泥炭による火力発電所の設計案を検討し、すぐその建設にとりかからせている。<sup>331)</sup> またゲ・オ・グラフチオは1918年1月という困難な時期に、レーニンがヴォルホフの水力発電所建設を考えたことに驚嘆している。<sup>332)</sup> グラフチオにはすでに1911年にヴォルホフ水力発電所設計をツァー政府に提出したのだが、ツァー政府はそれを実現する力をそなえていなかった、という経験がある。レーニンはヴォルホフ発電所の建設案をいち早く人民委員会議に提出したかったのだ、とグラフチオは回想記に記している。<sup>333)</sup> 1918年の3月、レーニンは、『ペトログラドとモスクワの工業の電化にかんする覚え書』を書いている。それは、最高国民経済会議（ВЧХК）の電気工学会と最高国民経済会議の経済政策部会の合同会議の席上メモしたもので、それによると、ヴォルホフ河に6万馬力の発電所、マレーヤ・イマトラ瀑布に出力100万馬力の発電所の建設が予定されている。<sup>334)</sup> 同年4月22日に、人民委員会議は、最高国民経済会議のエネルギー部会主任ベ・ゲ・スミドヴィッチから同趣旨の内容の報告をきき、ペトログラドとモスクワの電力確保の問題を検討している。<sup>335)</sup>

この時期にレーニンは『科学技術の計画の下書き』（1918年4月18—25日執筆）を書き、科学アカデミーにたいして最高国民経済会議は「ロシアの産業を再組織しロシアを経済的に高揚させる計画をできるだけすみやかに作成するため専門家からなる一連の委員会」をつくることをただちに委嘱しなければならないとし、その計画のなかに、「工業と運輸を電化し、農業へ電気を応用することに特別の注意をはらうこと。燃料の採取と輸送にたいする最小の支出で電気エネルギーをえるために、下等な燃料（泥炭、下等石炭）を利用すること」が含まれるべきことを強調している。<sup>336)</sup> 『下書き』にみられるレーニンのこの考えは、のちのゴエルロ創設に直結する具体的構想の出発点となったという意味で重要である。

国内戦と外国軍事干渉によるソヴェト新政権にとってもっとも困難な2年間（1918—1919）にも電化方策はつけられた。一連の工業地区で電化にかんする地方の委員会が創設された。たとえば、ペトログラドでは新しい電力3500KWHをえている。<sup>337)</sup> これは些細な数字ではあるが「電化の分野における実践活動のはじまり」<sup>338)</sup> としての意義は大きいといわなければならない。



1919年12月にクルジジャノフスキーがレーニンを訪ね、ロシア中央諸県での泥炭採掘の発展により、ペトログラド、モスクワ、その他都市での燃料危機を緩和することができるという燃料バランスにおける泥炭の意義と、新しく泥炭を基礎に発電所がつくれるという電力調達面での泥炭の役割について報告している。クルジジャノフスキーが退去して数時間後に、レーニンはクルジジャノフスキーに手紙を送っている。<sup>39)</sup> それによると、泥炭に関する先刻の報告を論文にまとめ出版物にし問題提起をなすべきこと、そのさい「泥炭の埋蔵量は数10億トンであることについて。/その燃料価値。/その産地——モスクワ付近、モスクワ地方。/ピーテル付近——なるだけくわしく。/その採掘の容易なこと（石炭、頁岩、その他にくらべて）。/現地の労働者と農民の労働をつかうこと（手はじめとしては一昼夜に3時間ずつでもよい）。/これこそこんにちの発電所のもとで何倍もの電化をおこなう基盤であるということについて。/これこそ、工業の復興の、——社会主義的な労働の組織（農業＋工業）の——燃料危機からの脱出（われわれは、運輸用に何百万立方の木材を解放するだろう）のもっとも手早い、もっとも確かな基盤だ。/…（後略）」<sup>40)</sup>

1920年1月23日に執筆、レーニンがクルジジャノフスキーに送ったつぎの手紙は、電化プランに対するレーニンの基本的姿勢を示すものとしてそのもつ意味は大きい。全文をここに引いてみる。

「ゲ・エム、

論文を受けとって、一読した。

すばらしい。

このようなのがいくつか必要だ。そうなれば、小冊子として出すことにしよう。われわれに不足しているのは、まさに進取の気性に富む、あるいは「推測のきく」専門家だ。

(1) さしあたり注をとりぬく、短くするなりすべきだ。新聞としては、注が多すぎる（あす、編集者と話してみる）。

(2) 技術的な計画（これは、もちろん、多年の仕事であって、火急な仕事ではない）でなく、政治的あるいは国家的な計画、すなわち課題を、プロレタリアートに付けくわえることはできないだろうか？

たとえば10年（5年？）内に20—30（30—50？）の発電所を建設し、半径400ヴェルスタ（あるいは200ヴェルスタ——それほど強力なものでなければ）おきに泥炭なり水なり頁岩なり石炭なり石油なりをつかうセンターを国全体に点在させる（これはロシア全土を大ざっぱにとってみての話だが）。いまずぐ必要な機械や罐型の購入をはじめよう。10年（20年？）<sup>41)</sup> 後には、われわれはロシアを「電気の国」にするだろう、といった。

君がこのような「計画」くりかえしているが、技術的な計画でなく、国家的な計画の草案を出すことができるだろうとおもっている。

仕事に取りかかれば、10—20年のうちに、工業のロシアをも、農業のロシアをも、ロシア全土を電気のロシアにすることができるだろう、というはっきりした、明るい（基本的にはまったく

科学的な) 展望で大衆の心をひきつけるために、明瞭に、わかりやすく、いますぐ、このような計画案をあたえるべきだ。われわれは、なにほどこかの(何千あるいは何百万馬力またはキロワットか、だれもわかるものでないが) 機械の奴隷その他を手にいれよう。

それ以外になお、センターと勢力圏つきのロシアの概略地図をつくってもらうわけにはいかなidろうか? それともまだそれは不可能だろうか?

くりかえして言うが、10—20年を目安にした偉大な綱領で、労働者と自覚した農民との大衆の心をひきつけるべきだ。

電話で話そう。

レーニン

二伸。クラシンの話では、鉄道の電化はわが国にとっては不可能だということだ。そうだろうか? もし、そうだとすると、5—10年後にはあるいは可能になるだろうか? あるいはウクライナでは可能だろうか?

地図をつけた、あるいは発電所の概略の一覧表(その数)をつけた、全国土のエネルギーを集中することができる展望をつけた発電所網の「国家計画」について特別な論文を書くべきではあるまいか?

この手紙を読んだら、どうぞ、電話をかけてくれたまえ。話をしよう。」<sup>29)</sup>

この手紙で、われわれは電化プランに対するレーニンの基本的態度を知ることができるが、とくにレーニンが電化プランをたんに技術的なものとしてではなく、政治的・国家的計画として打出すことにより、戦争と国内戦・外国軍事干渉によって打ちひしがれた大衆の心をつかみ、将来へ明るく眼をひらかせようとした点は重要である。それは政治家レーニンの資質の大きさを示すものといえよう。1918年3月、新首都モスクワへの車中でしたためたといわれる、レーニンの論文『現在の主要な課題』<sup>30)</sup>にみえるあの政治家レーニンの気概とこれは共通である。

29) См. Д. Г. Жимерин. Плюс электрификация всей страны. Издательство Экономика, М., 1969, стр. 13.

30) 他の大規模な諸企業と同様、電力関係も1918年6月28日の大企業国有化布告によって、資本金100万ルーブル以上の発電所、電気関係の製品を生産している会社、工場、またケーブル関係工場が国有化された。Решения партии и правительства по хозяйственным вопросам, т. 1. Политиздат, М., 1967, стр. 97 参照。

31) См. Д. Г. Жимерин, там же, стр. 14. ヴィンテルはその後もレーニンと何回か会っているが、シャトゥラ開発にレーニンがいかに積極的であったかをのちに回想して記している。См. Воспоминания о В. И. Ленине, т. 3, стр. 238—240.

32) См. там же, стр. 169—170.

33) См. там же.

34) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 36, стр. 542, 635—636.

35) См. Д. Г. Жимерин, там же, стр. 13; Экономическая жизнь СССР. Хроника событий и фактов 1917—1959. Гос. науч. изд. «СЭ», М., 1961, стр. 23.

36) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 36, стр. 228—231 (т. 27, стр. 288).

- 37) См. Д. Г. Жимерин, там же, стр. 16.
- 38) Там же.
- 39) См. Воспоминания о В. И. Ленине, т. 4, стр. 38—39; Д. Г. Жимерин, там же, стр. 16—17.
- 40) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 51, стр. 105 (т. 35, стр. 366—367).
- 41) 10年, 20年の期間の問題は、『大阪毎日新聞』『東京日日新聞』の記者布施氏との会見のなかではっきりと述べている。См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 41, стр. 132—133; Ю. В. Воскресенский. Переход Коммунистической партии к осуществлению политики социалистической индустриализации СССР. Изд. МГУ, 1969, стр. 63; П. Б. Жибарев. Индустриализация СССР — великий подвиг советского народа, стр. 31.
- 42) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 40, стр. 62—63 (т. 35, стр. 370—371).
- 43) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 36, стр. 78—82 (т. 27, стр. 133—137).

4

1920年2月2日に行われた。第7次全ロシア中央執行委員会第1会期での全ロシア中央執行委員会および人民委員会議の活動についての報告のなかで、レーニンは、ロシアの電化問題を取りあげ、電化の計画案作成を提案している決議を最高国民経済会議と農業人民委員部で通過させるべく、また中央執行委員会がそのことを承認するよう求めている。レーニンは、クルジジャノフスキーの『ロシア電化の基本的任務』なる小冊子が出版されていることを伝え、それが、いろいろの問題提起をしていることにふれ、「これらの問題の宣伝——実際の適用でなく宣伝——は、いまもっとも重要な任務の一つになっている」<sup>44)</sup>ことを強調している。また、新しい技術的基盤としての電気の意義をのべ、その基盤の上に、「すべてを建設しなければならない」<sup>45)</sup>ことを明らかにし、そのために10—20年の期間を必要とするが、このさいまず農民に、「都市と農村を結びつける電化を基礎とした工業の組織」が「都市と農村の不和をなくし」「農村を文化的に向上させ」農村における「後進性、無知、貧困、病気、野蛮を克服」することが可能だろうということを農民にしめさなければならない、と力説している。<sup>46)</sup>

レーニンは1年後の1921年春に「食糧徴発」を「食糧税」に切替え、新経済政策への移行を計ったが、すでに、20年のこの時期に、戦時共産主義下の矛盾からの出口を求めていることが明らかである。電化は機械制工業生産の技術的基盤の確立という後進国の社会主義工業化にとっての一般的命題をおさえながら、一方ここでみられるように、レーニンは、労農同盟にとって、ひとつの大きな鍵の役割をこの電化にもおわたしたのである。ソヴェト・ロシアの歴史的条件のなかで、きわめて政治的・社会的意義をプランがもつという性格をレーニンはプランに与えたのである。

上記レーニンの提案により、中央執行委員会は、工業、農業、運輸にとって電化が第一義的意義をもつことが強調された決議を採択し、最高国民経済会議と農業人民委員部、通信人民委員部に国家発電所網建設プラン作成を委託した。<sup>47)</sup>

1920年2月21日、中央執行委員会の決議を遂行するため、最高国民経済会議幹部会は、電気部の下につくられた電化委員会を確認し、<sup>48)</sup> 3月に、人民委員会議はロシア電化国家委員会（ゴエ

ルロ)を正式に発足させている。<sup>49)</sup>

当時レーニンは、イギリスの新聞『デイリー・エクスプレス』特派員の質問にたいする回答(2月18日執筆)のなかで、国内戦と軍事干渉によって荒廃した国の経済復興に全力を注ぐとともに、多数の学者、技術家の援助によって、全ロシア電化計画を作成していることを伝え、「この計画は、長い年月を予定したものです。電化はロシアを生まれかわらせるでしょう。ソヴェト制度を基礎とする電化はわが国における共産主義の基礎、搾取者のいない、資本家、地主、商人のいない文化生活の基礎の最後の勝利をつくりだすでしょう」<sup>50)</sup>とのべている。はやくもここで、のちに、第8回全ロシア・ソヴェト大会でのレーニンの有名な「共産主義、それはソヴェト政権プラス全国の電化である」という言葉の内容が明らかにされている。

レーニンは、2月25日の県国民教育部校外教育課主任第3回全ロシア会議での演説で、中央執行委員会の採択した電化についての決議に注目するよう呼びかけ、とくに、労働者国家に徴集された穀物の代償としての工業製品に対する農民の要求をみたすためには、何よりも経済復興が肝腎であるが、そのばあい、古い経済的、技術的基礎ではそれは不可能であり、新しい基礎の発見が必要であること、その新しい基礎こそが電化計画であることを強調し、この計画を推進する過程で、文化・技術教育の水準を高めて行こうとの意図を明らかにしている。<sup>51)</sup>

また『カザック勤労者第1回全ロシア大会での報告』のなかでも、数年間にロシアが電線網でおおわれ、「全ロシアが、古いやり方ではなく、新しいやり方で復興され」<sup>52)</sup>ドイツの文化に達することの可能性を電化計画が与えることを示して、この事業が1年や2年でなしとげられるものでないことを認め「文化的工業」(電化)の完全な勝利には10年以上の期間を要するであろう、とのべている。<sup>53)</sup>ロシア共産党(ボ)第9回大会でも、この計画にもとづく経済復興という闘争は、戦闘のおこなわれる戦線におけるよりいっそう困難であることを訴えている。<sup>54)</sup>

のちにレーニンは『青年同盟の任務』のなかで、共産主義社会建設にとって工業と農業の復興が第一であり、そのためには「電力に立脚する現代の技術的基礎のうえに」たたなければならぬことを強調している。そのばあい、「電化には文盲の人は役にたたないし、また読み書きができるだけでもまだたりない」「電力とはなにかということを理解するだけではたりない。工業にも農業にも、さらに工業や農業の個々の部分にも、電化を技術的に応用する方法を知らなければならぬ」「それを自分でまなびとらなければならない。これを勤労青年層全体に教えこまなければならない。これこそ、すべての自覚した共産主義者の当面の任務」であると強調し、「現代の教養を基礎としてはじめて共産主義をつくりだすことができる」と主張している。<sup>55)</sup>

このことは、「労働者統制」をすすめるなかでも、「協同組合化」をひろげるなかでもレーニンが一貫して打出した労働者、農民の教育文化水準の向上の志向と一致している。ソヴェト・ロシアにおける「文化革命」は、社会主義建設のための諸方策、なにかんずく、経済政策と表裏をなしているのを知ることができる。

1920年3月29日から4月5日にモスクワで第9回ロシア共産党(ボ)大会がひらかれた。この

大会の中心討議のひとつは、経済的破壊を解消し、経済的復興の方途を明確化し、社会主義の経済的基礎をつくりだすことを目的とする国民経済発展の単一プランの作成であった。そのなかでとくに電化の問題が注目された。

大会決議には広汎な電力利用を技術的側面の重点としなければならないとし、そのばあい全般的経済プラン実施のつぎのような主要段階が相応するとのべられている。

「1. 国民経済電化プランの作成および電化の最小限プログラムの実行、すなわち、電力供給の主要拠点の選別、そのための現存の発電所、また建設中の第1次・地区幹線の一部の利用。

2. 第1次・主要地区発電所、主要送電線の建設、それに相応した電気工学設備のための工場の活動範囲の拡張。

3. 第2次・地区発電所の建設、電力網の一層の拡大、最重要生産工程の徹底的電化。

4. 工業、運輸、農業の電化…」<sup>56)</sup>

このように、1920年の春には、全国的規模の電化路線が党の方針としても確立するのである。

ゴエルロ・プラン作成のために、クルジジャノフスキーを中心に約200名の学者、専門家が動員されたことはすでにまえにのべたが、この人たちの活動を保障するために特別の援助が与えられた。たとえば、レーニンは、1920年3月19日にペトログラドの北部地区国民経済会議議長イ・ペ・コトリヤコフに電報を送り、ゴエルロのペトログラド・グループが必要とする資材、配給命令書を至急入手できるよう援助すべきことを提唱している。<sup>57)</sup> また、ペトログラド食糧管理部長のア・イエ・バタエフにも、ゴエルロ・ペトログラド・グループに食糧の特別配給を行うよう要請している。<sup>58)</sup> これは、戦時共産主義体制下で食糧の切符配給制が厳守さるべきもとの特別の計らいであった。

1920年12月22日から29日にひらかれた第8回全ロシア・ソヴェト大会に、重要な議題としてゴエルロの作成したロシア電化プランが提出された。この大会に提出すべく準備されたゴエルロ・プランの正式の名称は『ロシア・ソヴェト連邦社会主義共和国電化計画。第8回ソヴェト大会へのロシア電化国家委員会報告』で、数百ページに及ぶものであった。ゴエルロ議長のクルジジャノフスキーが報告を行い、大会は、ゴエルロの提出したロシア電化プランを「偉大な経済的新事業の第一歩」と評価し、ゴエルロの活動に賛同し、この計画の作成完了の確認を全ロシア中央執行委員会、人民委員会、労働国防会議、最高国民経済会議幹部会、その他人民委員部に委託するよう決定した。そしてこの計画の都市・農村での広汎な宣伝活動と教育活動を展開し、電化計画実現のため最大の努力を払うことが決議された。<sup>59)</sup>

レーニンはこの大会の報告のなかで、とくにゴエルロの電化プランにふれ、ゴエルロ・プランは「全国経済を再建し、それを現代技術へ到達させるための活動計画」<sup>60)</sup> として「第2の党綱領」<sup>61)</sup> であり、「電化計画なしには」「実際の建設にうつることができない」<sup>62)</sup> ことを強調している。ただこのプランは「最初の接近として採択されただけの計画案」<sup>63)</sup> で「不変のもの」ではなく「日ごとに、どの仕事場でも、どの郷でも、改正され、練りなおされ、完璧にされ、変形され

る」<sup>94)</sup>ものとして考えている。このプランは「すくなくとも10年を予定し、そして共産主義に必要な真の経済的基盤のうえにどうやってロシアをうつすかを明示する偉大な経済計画として、全ロシアのまえに現われてくる最初の素描として」<sup>95)</sup>必要なものである、と唱っている。「スハレフカ」的なものに代表される資本主義要素を一掃し、ロシアに資本主義を復活させない一つの手段が電化であり、そして、国土が電化されるとき、工業、農業、運輸が現代的大工業の技術的土台のうえにすえられるとき、そのときはじめて、最後の勝利をおさめるであろう、<sup>96)</sup>と電化の基本的理念をここでも明示している。

つづいて、レーニンは、このプラン実施が同時に農村の啓蒙を意図していること、いいかえれば、電化の実施のためには大衆の文化的水準の向上が必要であることを強調している。「いまわれわれは、われわれの建設した一つ一つの発電所が現実に啓蒙の支柱になり、それがいわば電気による大衆教育にあたるようにしなければならない」<sup>97)</sup>とする決意は、前記『青年同盟の任務』での考えと一致する。

レーニンはこの報告をつぎの言葉で結んでいる。「一つ一つの工場、一つ一つの発電所を啓蒙の根源地にしなければならない。そしてロシアが発電所と強力な技術的設備の細かい網の目でおおわれるならば、われわれの共産主義的経済建設は、未来の社会主義的なヨーロッパとアジアの模範となるであろう。」<sup>98)</sup>

第8回ソヴェト大会に至る時期の多くの発言のなかで、レーニンは電化問題にふれ、電化の役割を明らかにしている。また、大会以後も、電化プランの実施にかかるレーニンの期待は非常に大きく、やはり、機会あるごとに、ソヴェト・ロシアの電化計画についてふれ、ゴエルロ・プランの意義とその実践を主張している。紙幅の関係上、それらについて詳述できないが、たとえば、ロシア共産党（ボ）第10回党大会での『割当徴収を現物税に代えることについての報告』のなかでは、小農業を大規模機械化し、社会主義農業を打建てるためには、とくに小農民の心理と習慣のすべてをつくりかえ、農業における社会主義を確立するためには、国土電化が必要であることを強調しているし、<sup>99)</sup>また、『小冊子「食糧税について」のプラン』および、『食糧税について』のなかでは、もし電化されなければ、小農耕者の個人主義と地方的取引における自由な商業が、資本主義への復帰をもたらすことになり、社会主義への移行の重要な条件のひとつに電化がある、とのべている。<sup>10)</sup>

また、1921年2月にレーニンは、『単一の経済計画について』を書いて、ゴエルロ・プランの総括を行い、同プランを、「すべての基本的な問題についての専門家の正確な見積り」<sup>11)</sup>がある「科学的研究」<sup>12)</sup>であり、しかも、「国家的課題をあたえ数百人の専門家を動員し科学的に樹てられた単一の経済計画」<sup>13)</sup>であると評価している。レーニンはこの「最初」の計画を「実際の経験のおしえるところの注意深い研究をもとにして、補足し、いっそう発展させ、訂正すること」<sup>14)</sup>の必要を力説し、これと反対の立場をとる、共産主義者、行政官との闘争を宣言している。ゴエルロ・プランの生みの親でありこれを立派に育てんとする空論家でないレーニンの姿勢を読むこ

とができる。

この論文をレーニンはずぎのような文章で結んでいる。「われわれはロシアを説得した。われわれはロシアを搾取者の手から勤労者の手にうばいとった。われわれは搾取者を鎮圧した。いまやわれわれは、ロシアを統治することをまなばなければならない。そのためには、われわれは謙虚さを、「科学技術の専門家」の実務的活動にたいする尊敬を、まなびとらなければならない。そのためには、われわれの数多い実践的誤りを実務的に、注意ぶかく分析し、それを徐々に、だが着実に訂正することができるようにしなければならない。インテリゲンツィアの・官僚主義的なうぬぼれをなるべくなくし、中央と地方でのわれわれの実際の経験がしめしているもの、科学がすでにわれわれにあたえているものの研究を、なるべく多くしたまえ。」<sup>75)</sup>

44) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 40, стр. 108 (т. 30, стр. 310).

45) Там же. 46) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 40, стр. 109 (т. 30, стр. 311).

47) См. Д. Г. Жимерин. Плюс электрификация всей страны, стр. 18—19.

48) См. Экономическая жизнь СССР, стр. 56.

49) См. Д. Г. Жимерин, там же, стр. 18—19. 1920年2月21日に最高国民経済会議幹部会は電気部のもとに創設された電化委員会を確認し、つづいて、国防会議がゴエルロ条令を確認している。また、最高国民経済会議には、農業人民委員部との合意のもとでゴエルロの構成人員の決定と確認が委任されている。См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 42, стр. 340 (т. 32, стр. 115).

50) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 40, стр. 148 (т. 30, стр. 343).

51) См. там же, стр. 163—164 (стр. 352).

52) Там же, стр. 186—187 (стр. 373).

53) См. там же, стр. 187 (стр. 373—374).

54) См. там же, стр. 257 (стр. 431).

55) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 41, стр. 307—308 (т. 31, стр. 264—265).

56) Институт марксизма-ленинизма при ЦК КПСС. КПСС в резолюциях и решениях съездов, конференций и пленумов ЦК. 1898—1970. Изд. 8-ое, доп. и испр. т. 2. М., Политиздат, 1970, стр. 151—152.

57) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 51, стр. 164.

58) См. там же, стр. 198.

59) См. Экономическая жизнь СССР, стр. 68—69.

60) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 42, стр. 157 т. 31, стр. 482.

61) Там же.

62) Там же, стр. 483.

63) Там же, стр. 158 (стр. 483).

64) Там же.

65) Там же.

66) Там же, стр. 159 (стр. 484).

67) Там же, стр. 160 (стр. 485).

68) Там же, стр. 161 (стр. 486).

69) См. В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 43, стр. 60—61 (т. 32, стр. 194).

70) См. там же, стр. 222 (стр. 323); стр. 382 (стр. 302).

71) В. И. Ленин. Полн. собр. соч., т. 42, стр. 341 (т. 32, стр. 116).

72) Там же.

73) Там же, стр. 343 (стр. 117).

74) Там же, стр. 344 (стр. 119).

75) Там же, стр. 347 (стр. 122).

## 5

以上レーニンの電化思想を10月革命前と革命後のレーニンの著作をとおして跡づけ、同時に、それがゴエルロ・プランにどのように反映されたかをみてきたのであるが、さいごに、電化とゴエルロ・プランの性格を総括してみると、大体つぎのようになるのではなかろうか。

1) 後進国が社会主義へ移行するための基本的課題として、社会主義工業化と農業の社会主義化があるが、そのいずれのばあいにも、そのための物質的・技術的基礎の確立が必要である。ソヴェト・ロシアのばあい、この一般的命題の具体化のひとつが電化であった。電化の基礎の上に大規模機械制工業が確立し、社会主義建設が可能になった。電化は同時に農業においても社会主義化を促す物質的・技術的条件をつくり出した。

2) 上記一般的命題の具体化としての電化プランは、1920年期のソヴェト・ロシアの置かれていた歴史的条件によって、さらにつぎのような意味を与えられた。第1に、電化プランは、戦時共産主義下で労農同盟強化の槓桿としての役割を果たしたこと。第2に、文化革命としての役割の一端を電化プラン実施過程が担ったことである。

3) さいごに、電化を中心としたゴエルロ計画が長期経済計画としての意味を大きくもっていたことである。ゴエルロがのちにゴスプランに発展解消するいきさつからもわかるように、ゴエルロ・プランは社会主義経済計画の端緒となった。

レーニンの創意と思想によって生まれ、育ったゴエルロ・プランは、そのプランのもっている科学性の大きさと共に、このように経済的、政治的、社会的意義を、あわせて文化的意義をもっているといわなければならない。

(1971.1.10)

追記。脱稿後、ゴエルロ・プラン50周年を記念して書かれたイ・グラトコフの論文『偉大な経済計画』И. Гладков. Великий хозяйственный план. Вопросы экономики, 1970, №12. ヴェ・ステルコフの著作『ヴェ・イ・レーニンと電化』В. Ю. Стелков. В. И. Ленин и электрификация. Изд-ство «Наука», М., 1970. 資料集『ゴエルロ・レーニン・プラン50年』50 лет ленинского плана ГОЭЛРО. «Энергия», М., 1970. が手許に届いた。

また、最近、テ・レオンティエヴァのドキュメンタリー小説『第2綱領』Т. К. Леонтьева. Вторая программа. «Советский писатель», М., 1970. を入手して読んでいるが、これは電化をめぐる諸事実とそこでの活動家たちの姿を鮮明に描き出しており、きわめて興味深いものである。

(1971.4.27)